

救護所を学生で3月末まで運営



ボランティア活動の教訓①

・救護所の運営で重要なことは、患者情報、地域情報を一括管理し、共有していく「スタッフ」が重要。継続性を担保していくシステムが大切。

→医療支援は、必ず行政とうまく連携させなければならないこと。

このことを石巻日赤でも提案しました。

ボランティア活動の教訓②

・病院のかたづけ、救護所の運営等において、ほとんど学生にまかせられた。窓口を担当。

・4月の新学期まで、約2か月間で、延べ300名以上の学生が活動に参加。

・被災地で、ボランティア活動をしていた学生の方が、活動できなかった学生より元気。

→住民は被災者であると同時に、復興の主体者。できることは、できるだけやってもらう。

病院の片づけをしているラグビー部



ボランティア活動の副産物

・5年生以下のボランティア活動は、6年生にインパクトを与え、神戸大学の国試合格率は、全国でトップになった。

・授業が3か月中断したが、この年、留年者は一人も出さなかった。

・理解ある教授、助手と連携し、留年0名を達成。翌年も、国試の合格率は全国のトップクラス。

⇒震災は人を育てるという確信。

この活動を、1996年JAMAに掲載



JAMAへの掲載の経緯

- アメリカからのボランティアが、「この経験を、世界に発信すべき」と強く勧めてくれました。
- アメリカの編集者とは、何度もエメールで原稿の修正をしました。
- アメリカから指摘された問題点は、1)震災のHead Quarterはどこにあったのか、2)地元医師会で、救護所に非協力的なところがあったが、その理由は何か、等々ありました。

次のような想いを持ってJMATへ

- 東日本大震災の「復興」は、阪神大震災の「復興」と比較して、何十倍も困難なものになるのだろうという直感。
 - 被災地規模は何十倍。深刻な「国の財政状況」
 - 被災地の抱える、高齢化、過疎化等の問題。
- 「急性期から維持期まで」つまり、「復興していく全過程になんとか関わっていきたい」と考えていました。
- 単なる「復興」では未来はない。⇒「創興」

雄勝町での医療支援活動



雄勝の保健師さんの指揮の下



自衛隊の医療班も参加し



巡回診療の打ち合わせです



3月下旬の巡回診療の特徴

・超急性期は過ぎており、慢性疾患の患者の継続的フォローアップのシステムをどう構築していくのか！？

すべての医療資源を喪失しているので、復興には長期間を要する。

長期的展望のもとに、医療支援を遂行できるのかどうか。

患者のニーズとしては、リハビリやこころのケアの問題がでてくる。

この災害時に、何が機能したか。

- ・日頃から現場をしっている人達。具体的には、保健師、訪問看護、ケアマネ等。そうした人たちが作っているネットワークが重要。
- ・地域連携—Face to Faceの関係は、まさに災害時に重要です。一人暮らし高齢者、寝たきり、認知症の介護度4・5の人、透析の人等に対する迅速な対応という点で決定的です。
- ・雄勝では保健師さんが指揮・統括していました。医療計画の策定という観点でも重要。

合同会議の風景



石巻日赤の合同会議での提案

①合同会議に、「行政の担当者を参加させてください」としつこく要求⇒了解してもらいました。⇒避難所の巡回バスの開設、入浴サービスの提供など解決されていきました。

②担当地域を、13エリアに分割して、医療支援を効率的に進めるように、体制変更されたとき、この雄勝町の例をだして、保健師を各エリアに配置してもらうことになりました。⇒カルテ情報の一元的管理ができるようになりました。

3月24日から3月28日までJMATとして活動しました。

復興までは、まだまだ息の長い道のりです。

私は、当初から、なんとか、継続的にかかわることはできないかと考えていました。

「復興していく過程につきあいたい」と言う想いと、水浜の人達との出会いがありました。

⇒ 次は「出会い」についてお話しします。

雄勝町水浜、すべてが流されました



何も残っていない状況です。



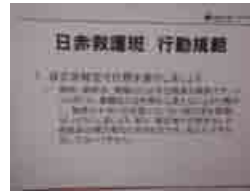
避難所の皆の顔は、まだまだ固いです



水浜避難所の素晴らしい組織性

- 3月26日時点で、約100名が避難所生活
- 食事準備、掃除、片付け等の役割分担がはつきしていました。
- 避難所の住人のすべての名前が記載されたノートがあり、それまでの医療チームの治療内容、処方内容がきちんと整理されていました。
- 自らが被災者であるのに、もっとつらい人に気を配るような思いやりが感じられました。

水浜では、お昼ご飯を出されました。
あなたなら、どう対応しますか。



- 「弁当が余って困っていますので、助けて思っ
て、食べてい
ってください。」

皆で対応を協議。松村団長の「返答」は？

「それなら分かりました。人助けと思って、弁当を
いただきます。でも、こちらももみじ饅頭が余
って困っています。明日、届けますので、助ける
と思って食べてください」

⇒団長は、次の日に来る広島第3班に、もみ
じ饅頭を持ってきてもらい、石川県チームを通じ
て、届けました。

その後の経過 一ヶ月後

- 広島県医師会のJMATは、3月24日から4月
17日まで、計8班宮城県石巻市に派遣されま
した。(県医師会速報に掲載されています)
- 県医師会としての活動は、4月中旬で、一旦
終了されましたが、当初から、「被災地の復
興」に継続的に関わるとい、個人的な考え
を持っていましたので、雄勝から帰るとすぐ
に、再度訪問する準備を始めました。

雄勝再訪問の準備

- 「亜急性期・慢性期」の状況を考慮し、医療支援には、内科医師と整形外科医師に加え、理学療法士、音楽療法士でチームを編成。
- 被災地で、唯一残った「全勝旅館」に発電機を送り、無理やり、5月連休での宿泊を頼み込む。⇒私たちの宿泊が、営業再開の契機になることを期待。

5月連休、松永・沼隈医師会有志が



伊丹から富士山経由で雄勝を訪れました



四月末には、桜が咲きました



雄勝湾の日の出は素晴らしい



水浜避難所での診察風景です

